

痙攣を始めた。

「もう、ダメですよ、そんなに暴れちゃ……」

今にも手からすっぽ抜けるようになる触手に追い打ちをかけ、更に擦り上げてやる。

(このまま一発抜いて……)

淫らな戦いの先手を取ろう、そう思っていた真鈴だったが悪魔も黙っていない。シスターの乳房に巻き付けた触手を巧みに操った。根元からとぐろを巻くように柔らかな乳房をねじり上げ、砲弾型に引き延ばしていく。

「んあうっ……!」

快感が詰まった肉の塊を強く圧迫される。胸の中で澀んでいた悦楽の熱湯が溢れ出して身体の全身へと流れ込んでいく。奉仕の興奮にしばし乳悦を忘れる事が出来ていたが、再び細身な身体を痙攣させて快感にうめいてしまった。

段差が出来るほどに強く触手を食い込まされても痛みを感じない。それどころか奇妙な火照りを持った肉縄にぎゅうぎゅうと強く圧迫されるたびに、切ない悦感が乳中でわき起こってしまう。

それでも真鈴はめげない。

「まだまだ私の手を堪能してはいないのでしょ？ もう少しじっくり味わったらいかがですか？」

力が抜けそうになる手に必死で命令を下し手淫愛撫を施していく。指の輪っかで根本をキュッと締め上げておいて、親指が先走りの進む小さな割れ目をくりくりと責めていく。人間であるなら亀頭のくびれと尿道を妖しくまさぐられているような感覚であろうか。

「うっ、おっ……慣れたものだな、本当にシスターか？ ここまでの手技

は……」

悪魔は明らかにとまどっていた。快感を施すことはあっても、自分が快感に翻弄されるようになる事など無かったのだろう。今までに出会ったことのない『強敵』に焦りを感じている。

「シ、シスターにも色々いるというのがお分かり頂けました？」

軽口を叩いてみせる真鈴だったが、彼女は彼女で焦りを感じていた。むにゅむにゅんとねちっこく乳肌を揉み立てられ、波打つように肉がたわめば先端の敏感肉豆が強く押し出されて、衣服に強く擦られる。

くきつ、むにゅつ、ふにゅつ……。

「んはああああ……」

戦闘シスターの口から熱い吐息が漏れた。乳首が衣服に押しつぶされる度にびりっ、びりっとした桃色の快感電流が炸裂し、満々に張りつめた乳房で暴れ狂つてから頭で炸裂する。我知らずのうちに身体が痙攣し、奇妙なほどに火照りきつた腰が切なげに揺らめいてしまうのだ。

(このおっぱい……ちよつと……敏感すぎいっ……)

今まではさほど胸は性感帯だと思っていなかった真鈴だったが、考えを改めざるを得ないようだった。触手の責めはただ乱暴だけではない。時に強く締め上げて真鈴をうめかせたかと思えば、今度は絶妙な力加減でやわやわと揉み込んでくる。

「んく……は……ああ」

思わず口が切なげにわなないてしまった。熱く湿った吐息が漏れる。愛撫の手が止まりそうになるが、意思を総動員して手を動かし続けた。

ねつとりと乳房をもまれると、乱暴な引き延ばしで敏感になっていた乳肌が過剰なまでに反応してしまう。乳芯にじんわりとした気だるい心地よさが充滿し、身体の内部へとゆっくり染み渡っていく。力任せに絞

